

第13回 国立市文化芸術推進会議 議事要旨

1. 日 時 令和2年2月25日(火) 19:00～20:45
2. 場 所 国立市役所3階教育委員室
3. 出席者 (委員)
池田委員、足羽委員、高橋委員、綿引委員、福間委員、渡辺委員、久保委員、湯本委員
(欠席委員)
今村委員、沢辺委員
(事務局)
伊形生涯学習課長、青木社会教育・文化財担当主査
4. 傍聴者 0名
5. 議 事 (1) 開 会
(2) 文化芸術推進基本計画の進捗状況について
(3) 計画の点検・評価について
(4) 閉 会
6. 配布資料 資料13-1 計画推進のイメージ
資料13-2 文化芸術推進基本計画施策・取組進捗一覧表
資料13-3 令和元年度の計画の進捗状況について【報告】

7. 内 容

■今村委員、沢辺委員より欠席する旨報告があった。

(1) 開会

■事務局より本日の配布資料の確認及び本日の進め方について説明を行った。

(2) 文化芸術推進基本計画の進捗状況について

(3) 計画の点検・評価について

■事務局より、資料13-1、13-2、13-3に基づき令和元年度の計画の進捗状況等について説明を行った。

■説明後、委員より以下のとおり質疑・意見等があった。

【湯本委員】

◇職員向けアートマネジメントセミナーの開催について、もう少し詳細を教えてください。

【事務局】

◇お二人の方にご登壇をいただいて、その方たちに今やっているプロジェクトのお話をさせていただく予定である。そのプロジェクトは、文化芸術に関するものであるものの、実はほかの施策の課題解消に向けた取組みでもあるため、それが他施策ともつながっているということを実感していただくというようなセミナーを開催する予定である。

◇1人は国立市内で活躍されている方をお願いをし、もう1人は、市外で活躍をしている方を

お招きする予定である。例として、八王子市議会議員でもあり、「AKITEN」という八王子市の空きテナントを活用したプロジェクトを主催している方に登壇いただく予定である。「AKITEN」は、空きテナントを使ってさまざまなアートプロジェクト実施するというものであるが、実際はアートプロジェクトをメインにしつつも、空き家対策という行政課題の1つの解決策にもなっており、今非常に注目されている事業になっている。その方と国立市内で活躍されている方をお呼びし、国立市でどういうことが考えられるのかなみたいなのをお話しいただく予定である。これと同様な形で全3回開催予定である。

【池田議長】

◇職員向けということだが、どのような方が参加される予定か。

【事務局】

◇一義的には管理職も含めた全職員に対して声をかけようと思っている。また、今回の趣旨としては、福祉、教育、産業、まちづくり、国際交流といった、文化芸術基本法の例示がされている分野というものがあつたため、そこに関しては個別にもお声かけをしようと思っている。

◇方策をたくさん持っているほうが、当然、施策などの課題解決ができる場合があるということの一つで、例えば福祉の分野で福祉の方からのみ見ても問題解決できない事象があつたとして、そこに文化芸術の視点を持つことによって、行政課題を1つ解決できるような方向が、もしかしたら出てくるかもしれない。国立市において条例を制定し、計画を策定したけども関係ないやと思ってしまう人たちがいてしまったら困るという思いもあり、より、職員にこういう行政課題に向かうときに、文化芸術を一つのツールとしていただいて、産業、まちづくり、福祉といったところに生かしていただきたいという狙いのもとに実施をしたいと考えている。

【渡辺委員】

◇北秋田市というのは、旧合川町のことか。

【事務局】

◇そのとおりである。

【渡辺委員】

◇自分の子供が小さいころは合川町との交流で、合川町から児童が夏休みや春休みに我が家にホームステイで来ていた時期があつた。それは市の事業ではなく、ボランティア団体の事業でずっと続いてきたが、この北秋田市との交流事業はその延長線上と思ってよいか。

【事務局】

◇渡辺委員にお話しいただいたように、国立市と旧合川町は何十年も前から市民間での交流が行われていた。そこが契機となり、国立市では北秋田市と友好都市協定を締結し、さまざまな交流事業を進めることとなった。その一環として、北秋田市が行っている事業の一つである「マタギの地恵体験事業」に国立市から親子を派遣する事業を行ったところである。北秋田市は、マタギの発祥の地と1つの説とされていることから、それを疑似体験する事業を展開しており、11組の親子が3泊4日で北秋田を訪問し、一から絞めた鶏でできりたんぼ鍋をつくっていく、魚の内臓をきれいにさばいたもので焼いていく、植林活動を行うといった、国立市ではあまり体験できないようなことを経験し、新しい文化を知る契機としてもらったところである。本事業は令和2年度以降も継続していく予定である。

【渡辺委員】

◇我々が行っていたころは、国立市からバス1台で行って、合川町のいろんなおうちに泊まらせていただいた。娘が秋田のお宅から帰ってきて生活面や、トイレや、さまざまなものにカルチャーショックを受けたようで、帰ってきて子どもがわき出るようにしゃべっていたのを思い出した。今は、時代が進んで市が実施しているようだが、交流事業というのは大事なところである。

【池田議長】

◇海外との交流というのは、国立市は今回が初めてとなるのか。

【事務局】

◇国立市は26市の中で唯一、友好都市・姉妹都市を持っていなかったところがあったが、イタリアのルッカ市については、国立市の桜の種をルッカ市に持って行って、そこで同じような桜が咲いているというつながりがあり、現在、友好都市協定の締結を目指しているところである。

◇資料でもご紹介したイタリア・キッズフェスタは、沢辺委員にはかなりご協力をいただいたと聞いている。このほかにも沢辺委員には市職員に対する研修で講師としてご登壇いただきルッカ市のご紹介をいただいたところである。

【湯本委員】

◇本田家住宅が東京都の指定有形文化財になるとのことだが、国立市の財政力は不透明な部分があるが、小さい市で色々やるよりもかなりな前進だと思うが、建物と同時に膨大な資料もあり、その調査や整備にすごく時間がかかるというお話を聞いたと思うが、この資料は指定文化財にはならないのか。

【事務局】

◇今回の東京都の指定については、「建造物」という形で、住宅自体が評価されての指定という形になり、寄贈いただいた資料については、指定の対象外となっている。一方、市では、資料の活用を考え、博物館機能を持たせ復元をしていきたいと考えているため、本田家の敷地の中に資料の保管庫のようなものは作る必要があると考えている。そこをうまく事務スペース、研究スペースみたいな形にして、そこで今後の資料研究をしていくという構想は持っている。そういった附帯設備というところに関しては、東京都補助金を活用できる余地はあると考えている。

【湯本委員】

◇非常に貴重な資料がたくさんあるという話を伺っているため、早くそういった施設を整備して、さまざまな研究者に提供できるようになることを目指しているのではないかと思うが、そもそもたくさんありすぎて、それらを整理するのも専門家が必要なのではないか。そういった点が、国立市だけでやるのがすごく大変なのではないかと思うし、価値があるものだとすれば、国立のみの財産ではなく、東京都の財産とも言えるし、国の財産とも言えるものだとすれば、そういうところで何か、もう少し支援をいただいて、早目に資料として活用できるようになれば良いと思ったところである。

【福岡委員】

◇どの施策、取組もそれぞれ足がかけられているという感じで、それぞれが結構やっているな

という感じがする一方、この中で一番目玉というか、ここが国立のおもしろさが出ているという意味で考えたらどれになるか。

【事務局】

◇選定するとなると難しいところがある。

【福間委員】

◇やはりそれが少し見えにくい。

【事務局】

◇我々が主催者ではないため、ここで申し上げるのが少し恐縮するところがあるが、やはり国立の特性が一番出ていると感じたものは、「放課後ダイバーシティ・ダンス」である。ただし、我々が主体的に事業を動かしているわけではないため、市の成果となってしまうと少し違和感がある。

◇生涯学習課としては、やはり行政計画の印刷製本プロジェクトは一つの成果である。行政計画は基本的に製本していく際には、どうしても固い、あるいは当たり障りのない製本をすることが多い中で、美大生と一緒にああいうものをつくっていくというのは、新しい発想であると思っている。これもやはり、文化芸術に関する条例が制定され、計画自体に連携事業を位置づけたからこそできたのではないかと思っており、言い方変えれば、このような挑戦も、今度は行政としてやっていくことが多少できるようになってきたなと感じている。

【渡辺委員】

◇デザインは何点かあってこの案に絞ったのか。

【事務局】

◇そのとおりである。日本人の学生1名、アメリカからの留学生1名に実際に国立市に何度も来てもらって、デザインテーマみたいなものを決めてもらった。デザイナーの感覚では国立市はレトロな町という印象が非常に強かったようで、最初はレトロ色を全面に出したデザインにする予定だったそうだが、計画自体の説明を学生たちにしたところ、未来に向かっての計画なのに、レトロ色にしてしまうと、計画との整合がとれないのではないかとデザイナーたちから提案をいただき、「レトロとポップ」をテーマにして、数パターン出していただいたうえで、現在の形になっている。

◇内容は当然ながら変更されていないが、枠組みをすごく大胆にデザインしてあったり、図などはリデザインしてあったり、文字を小さくしつつも、文字間を調節して読みやすくしたりといった工夫も施され、非常におもしろいものになったのかなという感じはしている。

【渡辺委員】

◇どうしてこういうデザインになったんだろうと思って、デザイン案を眺めていたところだったが、国立の花が梅であるから、梅のデザイン、色だなと事前送付された資料では思っていたが本物だと少し紫な印象を受けた。

【事務局】

◇現在お配りしてあるものは見本色であり、実際は、黒とピンクと金の3色だけで構成されており、それも「レトロとポップ」というテーマに基づきかなりこだわった配色としているし、ある意味、あえて国立市っぽくない色を使っている。

【渡辺委員】

◇市の花が梅だから、それをかたどっているのではないか。

【事務局】

◇イメージとしてデザイナー側に伝えてある。

【高橋委員】

◇先ほど事務局より「放課後ダイバーシティ・ダンス」の件について、市が主体ではないという話があったが、参考資料のチラシにもあるとおり、公益財団法人国立文化スポーツ振興財団が協力を行っている。事務局の発言のとおり、もともとはアーツカウンシル東京のほうから話を持ちかけられた事業ではあるが、実際にはかなり事業にかかわっており、来年度からは共催という形で、引き続き事業自体に積極的にかかわっていくという予定である。市も含めた財団側の事業として言っても差支えないレベルに来年度はなると考えている。

◇また、資料13-3の報告書の1ページに、多和田葉子氏に関する市民オペラ事業の記述があったが、現在の進捗状況としては、原案はできているという状況である。また、作曲をお願いしている段階であり、作曲家は平野一郎氏という方で、多和田氏とも実際にお会いをしていただき、確認をいただいたうえで鋭意作成中である。今後は、市民公募を行い、オーディションをして、オペラに出ていただく方を決めて、2021年度に公演を行う予定である。

【池田議長】

◇アートビエンナーレについては、財団事業として、これまでに2回開催されてきたが、来年度から一旦中止ということが発表されたが、それについてのご説明をお願いしたい。

【高橋委員】

◇アートビエンナーレについては、2015年に大学通り、2018年にさくら通りに計16の彫刻作品が設置され、市民や市外の方からもかなり親しまれているイベントであった。一方で、市民の方が参加してやるイベント事業ではないという意見もあった。そのような中、さくら通りに関しては、まだ途中までしかできていないという状況もあり、アートビエンナーレについては、「一旦中止」という考え方で来年度は進めていきたいと考えている。

◇ビエンナーレに代わる事業として、来年度よりアーツカウンシル東京の東京アートポイント計画を活用し、地域に新たなアートの拠点をつくっていくという事業を始める予定である。

◇ビエンナーレ自体を完全にやめてしまうという状況ではない。

【池田議長】

◇くにたちアートビエンナーレは、小規模な予算ながら全国的な展開を行ってきたが、アンケート等によっていろんな意見がある中で、ここで一度留まるという決断がされたわけである。

【綿引委員】

◇市民という目線を大事にしてほしいと言ってきた中で、今回提示されている事業をみるとやはりうけがいい方に行ってしまうところがあり、どうしても子供や若年層にスポットが当たってしまって、高齢者に対する事業などが抜け落ちてしまい、その辺が足りてないのかなというふうな感覚をもった。なので、市の政策の中にはそういった視点も必要ではないかということをも1点指摘したい。

◇また、新規事業を立ち上げるということはすごく大変なことで、高橋委員がおっしゃったような他でやっている事業に参画していくというのは一つの方法論だと思うが、例えば他市や他地域で行われている事業で、これだったら国立市で何とかできるというものがあれば、そんな

も取り入れてもいいのかなと感じたところである。

【事務局】

◇おっしゃるとおり、新規に全てを立ち上げるというのはとても困難である。事務局側もこの1年間、様々なセミナーや研修会に参加し、先進事例を調査研究してきた。綿引委員がおっしゃったような、高齢の方を対象にしたプロジェクトをやっている自治体の話も聞くことができ、非常に感銘を受け、国立市で一からやってみたいという気持ちも芽生えたが、国立市の既存資源、たとえば計画策定時にお話させていただいた「ひらや照らす」と今後つながっていった、高齢者の方に楽しんでいただく、世帯間交流していただくというような事業を、なるべく一から考えるのではなく、先進事例のものを吸収して、国立市でうまくアウトプットできる形になるのがいいのではないかと思っている。

◇なるべく省力化しつつも、視点としては新しい視点を持って動くというのが大事だと考えている。

【綿引委員】

◇私は、財団が中心でやられた「Play Me I' m Yours」はとても良い事業だったと思っている。あれはたしかパッケージングされたものを国立市で展開したという話を聞いたが、とても国立らしいイベントだなと思っており、もしああいういいものがあるのであれば、それは積極的に取り入れていただきたい。「Play Me I' m Yours」は老若男女問わず誰もが楽しめた事業であり、2週間ではもったいなかったという感じがしたため、ああいった事業が芸術文化のジャンルの中にあればどんどん取り入れてほしい。

【久保委員】

◇事務局の説明にあった、文化芸術の視点で行政課題に向かうといった話や、「おんかつ」事業の展開により芸術が豊かな生活や暮らしにつながっていくという視点で進められていくということはとても素晴らしいなと思っていた反面で、綿引委員がおっしゃったことも全く同感である。実際、例えば「ほうかごダンス隊」の取り組みも、意識があるご家庭のお子さんが行くことが多いように思う。放課後にすることがない、放課後の居場所が必要な子は、国立にもいる中で、ピアノの取り組みのように、まちの中での文化芸術があるところに自然と集まっていくという中で、生活が自然と豊かになっていくという、福間委員がおっしゃった国立のおもしろさであると思っている。旧国立駅舎というシンボルができた中で、そういうまちがやはり国立らしさなのかなというのを感じたところである。

◇ピアノの取り組みをヒントにして、まちなかにあるギャラリーなど、そういうふだんあるものが自然と生かされ、自然と集まるという進め方がいいなと、他の委員のお話を伺いながら思ったところである。

【足羽副議長】

◇当初この委員会が立ち上がったときに、何が国立らしいかとかいう議論を各委員目線で述べてきて、そこから見ると、レベルとか考えることはアップしたと思う一方、国立がほかより際立っていいということが標準化されちゃうのが、福間委員の意見とも近いかもしれませんが、そこが怖いとか残念だなと思うところがある。もちろん、ダイバーシティダンスをはじめ、さまざまところと連携して多様な取り組みを行っていることは評価できる一方で、例えば財団ではこういうことをやっている、それ以外ではこういうことをやっているということ

を持ち寄って、それは、この計画の中にここ当てはめられるみたいになってしまうと今までとあまり変わらなくなってしまうので、そこをどうしたらいいかと思っていた次第である。

◇2つ提案があって、やはり、本物に触れるような機会があるといということが一つ。もう一つは、アーツカウンシルの設立を急ぐ必要があるということである。事務局の説明では、東京都のアートプロジェクトに連携させてとおっしゃっていたが、それも1つの手であると思うが、アートカウンシルがいろいろなところの状況を聞きながら、そこで強弱をつけていくというか、方向性を出していくとか、あるいはプロジェクト間のコミュニケーションを図っていく、これが早く機能しないとだんだん元に戻ってしまうということは危惧するところである。

◇参考資料を見るとアートカウンシルの設置は考えていないというところが多々あるようだが、アートカウンシルを考えているということは国立らしさというか、国立がそれに非常に力をかけているということを示す一つにもなるし、大枠を決めながら走らせてみて、その中で役をどんどん付加させていくというのは早くやったほうがいいと思っている。資源を凝縮させて、配分をしっかり決めて、それで強弱をつけて、いつも恒常的にやっていくものと、目玉的に5年に1回とかでやるものにするなどしてはどうか。またぎの体験もすばらしい事業だと思う反面、これがだんだん総花的になってくると元に戻ってしまう恐れがある。

【事務局】

◇足羽委員にご紹介いただいた参考資料については、26市の文化芸術施策を所管している課が1年に1回集まって情報交換をするという会議で使用された資料の抜粋である。その中で、国立市として文化芸術推進機関の設置の検討をしているかという質問をしたところ、現状、26市の中でアーツカウンシルの立ち上げに向け動いているのは国立市のみであるということが判明した。

◇よって、足羽委員がおっしゃっていただいたように、これを一刻も早く立ち上げることについては、市としても相違ないところではあるため、仮の形で動くところをどこまでできるのかは不透明なところもあるが、設立に向けて今後も引き続き動いていきたいと考えている。

【福間委員】

◇設立に向けて動くというよりは、簡単なものでもいいので設立してしまえばいいのではないか。財政的な課題があるのであれば従事する職員を最低限にしたり、場所がなければ場所は当面市役所で用意するなどすればよい。設立に向けてやっていきますと言っていればきりがなし、時間をかければ問題は山積みだと思うが、それをコントロールしていくというか、あるいは一つの視点につなげていくという観点をもって、例えば綿引委員が言われた例では、子供のための企画でも、そこにどうしたら高齢者もかかわれるのかとかいったことも、アーツカウンシルがあれば、子供の例を幾つか考える中でつながりを考えることができたりするかもしれない。また、情報発信に関する取組では情報発信する主体としてもアートカウンシルは、最適だと思うので、早くつくらないことには意味をなさない気がする。

【足羽副議長】

◇同感である。例えば大学なんかで男女共同参画委員会、人権委員会といったどういうところに置いていいかわからないけど絶対必要なものに関しては、学長直属の機関として置いてしまうことが多い。それでとにかく走らせながら情報を聞きながら、それをどのように位置づけていくかを検討する。今回でいえば、アートカウンシル準備室のようなものを市長直轄か何か

に置いておいて、そこで体制を整えるなどはどうか。とにかく形をつくってしまって、1年か2年後にアートカウンシルという形にするようほうがいいような気がしている。アートカウンシルってほんとうにいろいろな種類があるので、国立市で必要なアートカウンシルはこういう機能が必要なんだということが2年間ぐらいの中で出てくる気がしている。

【池田議長】

◇推進会議の役目としては、年に1回程度施策の点検・評価というのが大きなウェイトを占めることになると思う。なので、これらを明確に出すことによって、他の問題に大きな舵とりができると思っている。

【渡辺委員】

◇私が住んでいる東の地域には、私は参加していないが、第二長生会という老人会がある。私の父が、退職後にその老人会で習字を教えたりしていた。この会では高齢者と子供の交流が行われているが、近年加入者が39名に減ってしまったそうである。老人会は、60歳から入ることができるが、最近はどうも入ってくれない。老人会は二、三カ月に1回、誕生会でいろいろ皆さんと歓談したり、その間に毎月とか毎週、体操があったり短歌・俳句の会があったりするが、先ほどの綿引委員のご意見を聞いて、確かに高齢者はそういうチャンスがなくなって、しかも老人会にも入らなくなってきているのだなと思うと危惧をおぼえる。

◇アウトリーチ事業を活用して、市老連の老人会において「こういった先生を派遣しますので、この次の老人会の会合はこうしてみてもは」といった提案などをしても良いのかもしれない。これからは高齢者も増えていくし、そういう会に入る方が少なくなっていくのは非常に寂しいことである。

【綿引委員】

◇足羽委員の話は、多分今の話も含めてのコーディネートの話だと思っており、それを事務局が行っていくことは無理であり、さまざまな企画や情報や、いろんなものがどこかに集中して進むというのは先端者が必要であり、そういう方がいれば、ものができやすい形、つくりやすい形になっていくのではないかと思っている。

【足羽副議長】

◇老人会に入っていない方は、別の団体には所属していたり、参加するのはもう少し先でいいと思っている人なのかもしれないし、そういった情報交換もすごく大事になってくる。横の情報交換と、季節のイベント、学生のような若い人たちが行くイベント、外から人を呼ぶイベント、など活動によってそれぞれが異なっている。その辺の見取り図をどこかが必ずわかっていて、それぞれのイベントがどこにフィットして、どういうふうにコーディネートしてみたいに、権限はそんなになくてもいいと思うので、俯瞰して、情報交換ができて、ある程度のプロジェクトの指針を計画しながら助言できるような団体であることが望ましい。

【福間委員】

◇本日の会議ではアートカウンシルの話を出し出していかという話だったと思うが、今、渡辺委員の話聞き、私自身も最近考えていることがあり、それは、老人会のようなコミュニティに全共闘世代が入るわけではなく、一方で、この計画の中では高齢者と子供たちが出会うにはどうしたらいいかと話しているが、それを例えばアートカウンシルから発信するという形になれば、今までの老人会のイメージとは違う。でも、実際には、老人会の方たちにも協力しても

らうことになると思うが、そこでもアートカウンスルという名前、どんなに小さな形でも、そこからの発信ということはすごく効果を上げるのではないかと思う。

◇私自身は、「老人」とか「高齢者」と言うからだめだと思っている。子供がいる、大人がいる、今度は子供でも大人でもないような存在になってきているような感じなので、ここを何と言うかという、言いようがない。言いようがないけれども、子供、大人、その先の何かそこを指すことになるから、私はアートカウンスルで世代間交流をやっていただきたい。これで、今60代、70代になっていく人も関心を持ってもらえるし、実際、従来の老人会というふうな形でやってきたこととは別なこと、子供や若い世代に出会いたい人たちに出会いの場を提供することができる。正直なところ、お手伝いに来てもらうことはあっても、老人会に主体的に参加する子供や若い世代は考えにくい気がしており、出会う場所にはならないように思う。

【足羽副議長】

◇世代間交流はいっそのこと、世代がないというふうに思ってしまったほうがよくて、例えば、ある教育財団で、これからどんなプロジェクトをやっという話をした際に、条件として、研究プロジェクトでも社会事業プロジェクトでも、必ず年齢の違う人たちをたくさん入れるという条件を満たしたプロジェクトには、優先的にお金をつけるというのがアイデアで出てきて、まだ実施はされていないが、そういったインセンティブをつければ、さまざまなプロジェクト、団体が名乗りを上げてくると思う。例えば、バンドのコンテストでも年齢層が全部入ったバンドをつくるコンテストを開く、といった様々な企画が出てくると思う。こういうことが実施できるようにするためにも、アートカウンスルというのは大事だと思っているし、全般を見ながら色づけを明確にしていくということができると思っている。また、アートカウンスル自体にも色々な世代が、色々な方が入っているのが望ましい。

【池田議長】

◇資料13-3の6ページには、「2020年のその先に、国立市が「文化と芸術が香るまち」になるために求められる「モノ」や「コト」という記述があるが、一番大切なことはモノ、コトから起きる出来事、出会いである。この「モノ」と「コト」があっただけではなく、それに会える環境をつくるためには、今福間委員が言われたようなアートカウンスルからの情報発信など、そういうものが主体になり、層・レイヤーによっていろんな構成はされてきているけれど、断面されたものから見えてくるものが必ずある。各層から見えるのではなく、その層になった断面から全部が見えてくる出来事が「文化」、「生きる」ということに結びつくのではないかと思う。

◇私は自分の文章では「結晶化」、「断面化された記憶」と書いたが、そういうものが発信されていくと年配の方にも届くし、本田家の資料・建物、駅舎、そういったものが連携しながら、市民や外部に伝わっていくのではないかと思っている。

【綿引委員】

◇どうしても、行政の方々って箱にはめようとするところがあると思うし、それをぶっ壊すということで、すごく新しいものができると思うし、私が最初に高齢者なんて言ってしまったためにそこからスタートしているのかもしれないが、これまでの議論されてきたことはまさにダイバーシティの世界である。

◇現在、立川のグリーンスプリングスというところにたましの美術館が新しくできるという

話の中で、若い方々というか、グリーンスプリングスを企画している人たちは自分たちのこと「とんがっている」と言っていた。まさに、ああいった場所にいろんなものがあって、いろんな楽しみ方ができるというのが、私自身は理想だと思っていて、そういう地域になってくれるといいなと思っている。

◇もっと言えば、国立のまちがそういうまちになってくれれば、みんながいろいろ楽しめる、生きていくのが楽しいよと思えるまちがあれば、それはまさに理想だと思うので、そういうものを抱いて推進する組織がこのアートカウンシルという話だと思うので、それを、皆さんの同意があればできるのではないかという気がしたところである。

【池田議長】

◇人を指す言葉ではないが、ものであれば漂流物というか、波に乗ってきてたどりついたようなものというのがあると思う、私が現在、住んでいるところにも世界から色々なものが流れつくことがある。そういうものを、こういうものが今現在ここにあるよと提示できたらいいなと思うし、人も、そういう意味では国立というまちに学生のときに来たとか、いろんな意味で「流れ着いた」わけであるから、それをきちんと、カウンシルで発信していける良い。

◇40年も前になるがイギリスなんかの地方都市でもどうということはない日常のものを組み合わせることによって、もう一つの新しい人との出会いを生み出すといった取組みはなされていたし、やはり、そういうものがわりと根強い文化であったような気がする。

【湯本委員】

◇今のお話を聞いていると、推進機関をとにかく早くつくることを提案しようという話で、さらに、行政のほうで中心となってつくってくださいという趣旨で良いか。

【池田議長】

◇点検結果として、そういうものがあつたほう早期に整備されるのが良いのではないかという、この推進会議からの提案になるかと思う。

【事務局】

◇もちろん行政中心の可能性もあるし、アーツカウンシル東京と一緒にアートポイント計画というものの中でNPO法人をつくる、あるいは、現行の財団の強化という考え方もある。なので、主体については行政と限定しているわけではない。

◇今、皆様のご発言を聞いていると、基本的には柔軟に考えができるような、コーディネーター機能を持つようなアーツカウンシルをイメージされているのかなと感じたため、そういったところをきちんと踏まえた上でという形にしていくべきであると考えます。

【池田議長】

◇扇のように、もとは文化推進の束だけど、広げれば芸もできるようなものというか、そういう、たためるときはたたんで、広げるときは広げてというようなものは考えられる考えじゃないかなと思う。

【湯本委員】

◇推進機関とかコーディネーター機能というのはイメージしやすい一方で、それが具体的な組織としてどういうものかなというイメージがなかなかわからない。例えばNPO法人などだと一つの形ができるが、今度は行政としてどこまで権限を付与するのかといった課題が出てくるのではないかと思う。

【池田議長】

◇予算の問題もあると思う。

【湯本委員】

◇当然あると思う。

【池田議長】

◇市や都から委託なりがなされて運営されていくようなイメージはあるが、単体のNPOではなかなかやっていけないものは多いように思う。

【足羽副議長】

◇この2年間アートカウンシルについてずっと議論をしてきて、アートカウンシルの専門の方にもお話を伺ったりしても、本当にたくさんあるので、準備室のようなものを早期に立ち上げ、集中的に検討してみて、そして幾つかのタイプを出して、国立市らしい、とんがっているものと丸いものとの組み合わせていかなければならない。行政はどうしても平準化させるというのが原則であるため、そうではなく、強弱をつけるというところでバランスをとることを前提とし、どの形が一番組織としていいのかというのを今幾つか検討してくださっているようなので、それをもう少し外部の方も入れて検討し、それで半年後に提案するなど、タイムラインを決めてやっていったほうが良いような気がしている。

【高橋委員】

◇事務局に確認するが、参考資料の調査結果を見ると、質問の趣旨を理解していない回答が幾つか見受けられる。それで、この会議で計画や条例を検討していた際に、26市の中でも条例や計画を持っていたところがそこそこあって、そういう中で、推進機関がどのようにうたわれていたかよく覚えていないが、その辺の情報はあるか。

【事務局】

◇今ぱっと思い浮かんだのは、府中市では昔から計画をもっており、近年改定をされたところだが、その計画内では、推進体制としては財団が記載されており、やはりそれが一般的な流れなのかなと思っている。

◇多くの市では日本のアートカウンシル、イコール財団なのかなと理解された上で、現状では財団を持っている市のほうが圧倒的に多い中で、これ以上は必要ないのではないかということでアートカウンシルの設置をしないと回答していると理解している。

◇ただ、国立市ではさらにそれに一步踏み込んだ形をとっていると認識しており、計画にも「新たな推進体制の検討」というふうに盛り込ませていただいた。本日の意見を踏まえ設立に向けたスピードは少し速めなければいけないと感じたところである。

◇アーツカウンシル東京のアートポイント計画の話でいえば、先方からも、やはり来年度ぐらいで一つの形みたいなものはつくらなければならないという話はいただいているし、それに向けた検討会議でも国立らしさってなんだろうみたいなものを議論している時間もあり、本日の推進会議ではとても貴重な意見をたくさんいただけたと感じているため、これらの意見を持ち帰り、また皆様に報告できる日までに、きちんと整え、活かしていきたいと考えている。

■事務局より、今後の流れについて説明を行った。

【事務局】

◇今後の推進会議は、当面は年に1回か2回程度の開催を予定している。

◇本計画については、今いただいたご意見も含めどのように進捗しているかを随時情報提供しつつ、こういった議論の場で、去年の課題をどのように捉え、解消したかを報告し、それをさらにブラッシュアップして、より良いものにしていけたらと考えている。